

ヨーク大学・CVR から雰囲気をお届け

ヨーク大学 CVR 博士後研究員

松下戦具 (まつした そよぐ)

現在私は、ヨーク大学 (York University ;カナダ) の、ヒロシ・オーノ (Hiroshi Ono) 先生のもとで、ポスドクとして視覚を研究しています。私の机があるのは、センター・フォー・ヴィジョン・リサーチ (CVR) という組織で、知覚や認知に限らずコンピュータ・サイエンスも共存する、視覚に関する総合研究所です。

CVR では最先端の研究がなされ、その成果が輩出されつづけています。かといって、皆がいつも朝から晩まで机にかじりついているわけでもないようです。昼時にはラウンジで昼食をとりながら談笑し、ときには日の高いうちに研究を切り上げて学内のパブでビールを飲むこともあります。そのメリハリの付け方は見習いたいものです。また、週に一度小講演が行われ、さまざまな分野の視点から活発にコメントがやりとりされますが、そこでもリラックスした良い空気を感じます。和気藹々とした雰囲気の中で、トップクラスの研究者たち (いわゆる、本や論文でよく見る名前) と交流できる。CVR はそんな魅力のあるところですよ。

海外に出る経緯は人それぞれだと思いますが、私の場合は、思わぬ機会を手に入れた、というケースでした。数年前の冬、オーノ先生は京都に滞在され、日本の研究者たちと共同研究されていました。私は、その分野の研究をしたことはありませんでしたが、たまたま作業を手伝わせてもらえることになり、そこで初めてオーノ先

生にお目にかかりました。そして何回目かのミーティング後、居酒屋でビールを飲みながらオーノ先生がふいに、「松下さんは海外で研究することに興味ないですか?」と……。私は何事にも即断即決が苦手なのですが、この時は意表を突かれて動転しながらも、「行きたいです!」と (頑張っ) 即答したのを憶えています。その話がつながって、2010年10月から1年間、カナダでの研究生活が始まりました。

日本人研究者にとって海外に出る理由の一つに、英語の習得があると思います。カナダ、特にヨーク大学のあるトロントという都市は多様な国からの移民が共存しており、さまざまなアクセントの英語が飛び交っています。さらに、私がごこない英語を話していても、誰も怪訝な顔をしません。こういった雰囲気のおかげで、私は楽しく英語と向き合うことができます。

私は当初、一年も海外で生活すれば英語もさぞかしペラペラになるであろうと期待していたのですが、それはちょっと楽観的すぎたようです。10ヵ月経った今でも、実験条件や分析方法を説明するのには骨が折れます。また、講演を聴いていても、やはり聞き取れない箇所だらけです。それでも、他人と英語で話すことに対して度胸が必要ではなくなりました。また、英語を使って人と知り合うことができるようになったのは、非常に大きなメリットだと感じています。

ところで皆さんは、当誌 50 号



Profile — 松下戦具

2008年、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。同年、大阪大学大学院人間科学研究科特任研究員、大阪大学大学教育実践センター助教を経て、2010年よりヨーク大学で博士後研究員。研究テーマは、視覚における興行知覚・形状知覚・注意など。

の「Ex-Over Seas」のコーナーをご覧になりましたか? 中溝幸夫先生が、今から36年前の体験として、当時のヨーク大学でのポスドク生活について書かれています。そのポスドク先というの、オーノ先生です。現在のオーノ先生はすでに名誉教授のような立場ですが、数人の学部生と私に的確に仕事を振り分けつつ、精神的に研究を進めておられます。その手腕にはいつも、「年季が違うな」と感服させられます。中溝先生の手記の中にはイアン・ハワード (Ian P. Howard) 先生のお名前も登場します。ハワード先生はオーノ先生よりもさらに年上ですが、彼もまた現役の研究者です (84歳だそうです)。定年制度のある日本では、こういった先生方に教えを請うことはなかなか難しいですよ。また、こんな大先生方のご自宅の綺麗な庭でゆったりとパーティーを楽しみながらファーストネームで呼び合う、なんてことはさらに貴重な体験です!